
闇の福音の従者は魔術使い

墮落人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の福音の従者は魔術使い

【Nコード】

N2705N

【作者名】

墮落人

【あらすじ】

衛宮士郎と吸血鬼の金髪少女の物語

プロローグ（前書き）

この作品は多分にご都合主義が含まれます。ついでに原作をブレイクします。

プロローグ

プロローグ

「ぐうぐう、い、痛い。つとここは何処だ？」

俺、衛宮士郎は目が覚めると、全く見覚えがない部屋にいた。取り敢えず現状把握。

（え〜と、確か、はっちゃけジズ、もとい宝石翁がいきなり来たと思ったら、「修行だ！逝つて来い」と問答無用で飛ばされて、なぜか空に出て、その時下に見えた城のぽい所に着地したが、その時足を捻り、仰向けに倒れて、なぜか落ちてきていたトランクがみぞおちに決まって、そこから気温が無いな。）

そんな時、扉の開く音が聞こえた。

「あつ！起きてたんですね。」

金髪少女が部屋に入つて来た。

「君が助けてくれたのかい？」

これが、金髪少女 エヴァンジェリン・A・K・マグダウエルとの出会い。

プロローグ（後書き）

この時のエヴァちゃんは吸血鬼になって百年いくかいかないかと、
いった感じです。口調とかはまだ変わってません。

こんな駄文でよければまた読んでください。

其の一 「店長と女子生徒」 (前書き)

修学旅行時ではなく、吸血鬼騒動から始めてみました。

今回も駄文です。

其の一 「店長と女子生徒」

其の一

喫茶 Summer Snow

カランカラン！

扉に付けたベルが、来客を知らせる。

士「いらっしゃい、千雨ちゃん。」

千「どうも、衛宮さん。相変わらず、他のお客さんがいないんですね。店、潰れますよ?」

と、言いながら千雨は、カウンターの席に着く。

士「別に金儲け目的でこの店を始めた訳じゃないからね。それに、此処が喫茶店って知っているのは、今のところ、千雨ちゃんだけだしね。で、今日は何にするんだい?」

何を隠そう、此処、Summer Snowは、表には看板などの広告類の物は一切無く、店の外観が、ちよつと年季の入った、今でも人が暮らしてそうな西洋風の民家だからだ。因みに内装は、入り口から見て、右手側にカウンターと椅子4つ、左手側に端から端まである長いソファにテーブル3つと1つのテーブルに二脚づつ置かれた椅子。こんな感じ。

千「じゃあ、緑茶と羊羹で。」

士「あいよ。」

千雨の注文に気の抜けた返事を返し、準備に取り掛かる。

士「はい、おまちとおさん。」

千「いただきます」

士「それで、千雨ちゃん？」

千「何ですか？衛宮さん。あ、この羊羹美味しい。」

士「エヴァの様子、どうだった？」

千「エヴァンジェリンですか？何時もどつり、授業、サボってましたよ。」

「元気にしてた？」

「朝のHRが終わった途端に教室から出て行きましたから解りませんよ。」

ヒョイ、パクッ

「そっかあ。報告ありがとう。」

「お礼なんていいですよ。タダで美味しい物が食べれるんですから。」

ズズズ、はあゝ

「」馳走さまでした。」

「もう帰るのかい。」

「最近物騒な噂があるんで、それじゃ。」

カランカラン

「ありがとうございましたー。」

「あっ、猫に餌やらねーと。まずいまずい、忘れるところだった。」

じじく

其の一 「店長と女子生徒」(後書き)

何故、千雨が士郎の店に入り浸ったているかという点、「不良に絡まれてる、千雨を士郎が助け、何となく店の場所を教えた。」こんなところですか。

次回の後書きは何故、千雨がエヴァの様子を見ているのかの話ですか。

其の二(前書き)

文才が・・・欲しい

其の二

其の二

茶道部、部室前

「ネギ・スプリングフィールドに助言者がついたかも知れん。しばらく私のそばを離れるなよ」

「はい。マスター」

「おーい、エヴァ」

(うつ…タカミチ)

「…何かようか？」

「学園長がお呼びだ、一人で来いだつてさ」
「わかった、すぐいくと伝える」

「茶々丸、すぐ戻る。必ず人目のあるところを歩くんだぞ。」

「何の話だよ？また悪さじゃないだろーな？」

「うるさい、貴様には関係ないことだ」

「……お気をつけて、マスター」

川沿いの道

テクテク・・・

コソコソ・・・

(茶々丸って奴の方が一人になった！チャンスだぜ兄貴！！一気にボコツちまおう！)

(だめー、人目につくとマズいよ、もう少し待ってー)

(な・・・何か辻斬りみたいでイヤね、しかもクラスメートだし)

尾行ちゆう・・・

木に引っかかったフーセンを取ってあげる茶々丸

歩道橋を登るおばあさんを運ぶ茶々丸

ドブ川を流される仔猫を助ける茶々丸

野良猫達に餌をあげ、微笑む茶々丸

「……………」ホロリ・・・

「…いい人だ」ダバー

「ちよっ・・・待ってください二人とも！！ネギの兄貴は命を狙われ
たんでしょ、しっかりしてくださいよう！！」

「と、とにかく人目のない今がチャンスっす、心を鬼にして、ここ
は一丁ボカーっとお願ひします」

「で、でもー」

「　　しよーがないわねー」

広場　三人と一匹+

ゴローン

「　　こんにちは、ネギ先生、神楽坂さん」

「　　油断しました、でも、お相手はします　　」

「茶々丸さん、あの　　僕を狙うのはやめていただけませんか？」

「　　申し訳ありません、ネギ先生、私にとってマスターの命令は絶対ですので」「ペ」…

「うつつ　　仕方ないです　　」

(ア、アスナさん　じゃ、じゃあさっき言ったとおりに……)

(うまく出来るかわかんないよ)

広場　戦闘

ザアア……

風が吹く。

「…では、茶々丸さん」

「…じめんね」

申し訳なさそうに杖を構えるネギと、アスナ。

「はい」

それに相對する茶々丸。

「神楽坂明日菜さん いいパートナーを見つけましたね」

「行きます！！契約執行シス・メア・バルス10秒間！！（ペル・デケム・セクンダス）

」

「ミニストラ・ネギイネギの従者神楽坂明日！！！！」
ぶわっ

「んっ
」

ドンッ

アスナが茶々丸目掛けて駆け出すと同時に呪文を唱えるネギ

「ラス・テル マ・スキル・マギステル」

（わ！？何コレ、体が羽根みたく軽い…これが契約の効果ってこと
…！？）

バクティオー

契約の効果に驚きつつも、茶々丸に攻撃するアスナ。

パシンッ！

繰り返されたアスナの右拳を躊躇無く弾くが、その際、アスナの左手を見て、先の攻撃が囷だと知る。

「えいつー!!」

ビッ

目を瞑りながら放たれるアスナのでこピンを、茶々丸は、アスナとの間に自分の右腕を滑り込ませ、アスナの左腕を受け止め、弾かれた指を 上体を逸らしかわす。

「はい！素人とは、思えない動き」

アスナ動きに、表には出さないが驚く茶々丸。その後も、わたわたと闘うアスナに対し、うまく攻勢に出れない茶々丸を尻目に、唱える終わるネギ。

「光の精霊11柱 集い来たりて」

(兄貴!!相手はロボだぜ!?手加減してちゃダメッス、ここは一発派手な呪文をドバーツと!!)

「うつつ」

ネギはカモの言葉に葛藤するが、

「魔法の射手連弾・光の11矢!!」
サキタ・マギカ セリエス・ルキス

魔法の射手を放つネギ。

「……!!追尾型魔法、至近弾多数……よけきれません」

「すみません、マスター……もし、私が動かなくなったら、ネ

「このエサを……」

ネギはその言葉を聞き、

「や……やっぱりダメーッ、戻れ!!」

魔法を戻そうとするも、数発は方向を変えずにそのまま茶々丸に向かうが、魔法と茶々丸の間に、一つの影が割り込む

「最後に踏みとどまったのは良かったが、いかんせん、魔法の制御が少し甘いな。」

自分の方に戻した魔法を盛大に喰らっているネギをそう評価しつつも、コートの中から一本の刀を取り出し構える

「神鳴流奥義、斬魔剣!!」

ドッ!!

抜刀と同時に放たれた斬撃は魔法を消し飛ばし、地面を抉る

「うーん、あの人に比べるとまだまだ、だな……っと、大丈夫だったかい?」

自分の剣技とある人の剣技を比べて、自分とあの人の差を実感しつつ、自分の背後に立っている緑髪少女、茶々丸に話しかける、男

「あ……はい。あ、あの貴方は……」

未だ状況を飲み込めないまま返事を返し、質問する

「うん?あー、俺はこの辺で喫茶店の店長やってる衛宮士郎だ、君

は？」

「あっ、私は、麻帆良学園女子中等部、3年A組、出席番号10番、絡繰茶々丸です」

「イヤ、其処まで聞いてないんだけど・・・」

名前だけで良かったんだけどなー、と士郎は苦笑いする

「そうでしたか、それは失礼いたしました」

「いや、まあ、いいんだけどさ・・・あっ、そうだ、これ・・・」

その手に握られたレジ袋・・・ではなく、お手製のマイバックを見る、エコロジニストの衛宮士郎

「あの・・・それは・・・」

遠慮がちに、尋ねる茶々丸

「うん？ネコの餌だよ、まあ、スーパーの特売品だけどね」

士郎の言葉を聞き、茶々丸は申し訳なさそうにする

「あの・・・私が先程に餌を与えましたので・・・すみません」

「あー、また明日来ればいいんだし、謝らなくていいよ」

それでも、謝り続ける茶々丸に士郎は

「あー、なら暇な時にでも店に来てくれないか？」

そう言つと、懐から取り出したメモ帳に店の特徴と店周辺の地図を書き、店があるところに印を付け、そのページを綺麗破り渡す

「・・・あの、これは？」

「俺がやってる店周辺の地図と店の外観の特徴、地図だけだと絶対解らないからね」

士郎は腕時計を見ると

「あつ、もうこんな時間か、夕飯作らないといけないから、じゃあ、またな」

と言ひ残し、足早に去つて行く

そんな士郎の背中を見送ると、ネギ達が居た方へ、振り向くが、其処には誰もおらず、茶々丸は、あの会話中に逃げたのだからと結論づけ、自分も家に帰るべくジェットを噴射させ、空に舞う。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2705n/>

闇の福音の従者は魔術使い

2010年12月9日08時54分発行